

THIS IS THE P.E.N.

日本ペンクラブガイド

一般社団法人 日本ペンクラブ
THE JAPANESE CENTER OF INTERNATIONAL FILM

日本ペンクラブ歴代会長の言葉から

島崎藤村

どんなに私たちが芸術を通して世界の人に結びつきたいと思っても、もし互いに交渉する道がなかったら、何によってそれが出来るでありませんか。私は会員諸君が、この新しい機運を看過しないで、自国の文学の上にも生気をそそぎ入れられることを望んでやまないであります。

(1935年/会長就任時の挨拶)

中村光夫

ペンクラブを言論の自由を守る会にしたい。言論の自由は、ペンクラブの外でも内でも同じこと。「言論の自由」についての討論がいつでもできるようにしたい。だからといって、楽しみのない会にしたいとは思わない。楽しみのなかに大事なものを、「自由」を守る会にしていきたい。

(1974年/会長就任時の挨拶)

井上靖

もう自分一人の幸福を求める時代は終わった。他の人たちが幸福でなくて、どうして自分が幸福になれるだろう。いまこそ、『孟子』の葵丘会議の故事にある、黄河の水を隣国に流し込んだり、兵器代わりに使ったりすることのないよう祭壇の前で誓いの盟約をした英知にならって、人間を信じ、人間がつくる人類の歴史を信ずる文学者の立場に立ちたい。

(1984年/国際P.E.N.東京大会開会式での挨拶)

井上ひさし

私は日本国憲法を大事に思う一人として、このペンクラブ、つまり国際P.E.N.の一員であることに大変誇りを持っています。つまりペンクラブに属することと、日本国国民であるということは、「永久平和」というところでスムーズに一つに結び合っ、融け合うわけです。ですから、日本国民であることと、日本ペンクラブの一員であることに、私は大変に名誉と誇りを感じております。

(2004年/京都例会での講演)



1代 島崎藤村
在任 1905-1943



2代 渡辺直政
在任 1944-1947



3代 斎藤隆三
在任 1947-1948



4代 石井重雄
在任 1948-1965



5代 中村光夫
在任 1965-1974



6代 中村光夫
在任 1974-1975



7代 斎藤隆三
在任 1975-1977



8代 高野純二
在任 1977-1981



9代 井上 靖
在任 1981-1985



10代 山本健作
在任 1985-1989



11代 高岡 健
在任 1989-1990



12代 島崎藤村
在任 1990-1997



13代 高野 健
在任 1997-2003



14代 井上ひさし
在任 2003-2007



15代 中村光夫
在任 2007-2011



人類の利益



一般社団法人 日本ペンクラブ
第16代会長 渡田 次郎

国際PENの発足は第一次世界大戦後の1921年です。そして、私たち日本ペンクラブは1935年に、この国際PENの日本センターとして設立されました。以来、第二次世界大戦のさなかにも、交流こそ断たれたものの日本ペンクラブは文筆家の良心として存在しつづけ、80余年の歴史を刻んできました。

けっして知識人のサロンではありません。偏った思想を持つ団体でもありません。私たちのめざすところは常に、言論・表現の自由と世界平和の希求です。ペンを握る私たちには、さまざまな原因によって引き起こされる暴力や戦争を阻止する使命があります。

そうした高邁な理想を掲げる限り、会員には個人的利益などなく、ご支持・協賛いただく企業や新聞社・出版社等の賛助会員にも直接の利益はないかもしれません。しかしながら国際PENも日本ペンクラブも、多くの人々の理解と情熱によって、長い歴史を今日まで刻んできました。

私たちの利益は、いつの時代にも、人類の利益でなければなりません。時の流れとともに、ともすれば人間は世界の平和よりも国家の繁栄を、社会よりも個人の利益を希むようになりました。しかし、こうした趨勢のなかで、日本ペンクラブはたゆみない活動をつづけています。私たち文筆家には使命があり、私たちの握るペンには、どのような兵器にも勝る実力があると信ずるがゆえです。

●ペン憲章

1. 文学に国境はない、よって政治的また国際的な船舳にかかわることなく、人々が共有する価値あるものとするべきである。
2. あらゆる状況下において、特に戦時において、遍く全人類の遺産である文芸作品は、国家または政治の一時的な激情にさらされることなく保たれねばならない。
3. ペンの会員は、自らの影響力を、諸国間の理解と尊敬のために行使すべきである。会員は、人種・階級・国家間の憎しみを取り除くこと、一つの世界に平和に生きる無二の人類としての理想を守ることに、最善を尽くすことを誓う。
4. ペンは、国内および諸国間において、思想の伝達を妨げてはならないという原則を支持する。会員は、自らが所属する国や地域社会、さらに全世界においても可能な限り、表現の自由に対するあらゆる形態の抑圧に反対することを誓う。ペンは、報道の自由を宣言し、平時における専制的な検閲に反対する。ペンは、より高度に組織化された政治・経済の秩序へむかうために、世界が必要な進歩をなしとげるには、(立法・司法を含む)政府・行政・諸機関への自由な批判が不可欠であると信じる。また自由には自制を伴うゆえ、会員は、政治的・個人的な目的のために、欺瞞に満ちた出版、意図的な虚偽・事実の歪曲を行なうといった、表現の自由の悪用に反対することを誓う。

※このペン憲章は、国際PENと各ペンセンターのもっとも基本的な規範です。1から3までは、1921年の国際PEN設立時から掲げられ、4の「検閲」への反対は第二次世界大戦後に付け加えられたものです。



日本ペンクラブとは

●基本理念

国際P.E.N.は、文学・文化に関わる表現とその普及にたずさわる人々が集まる唯一の国際組織です。創立は1921年にさかのぼります。

日本ペンクラブはその日本センターとして、「国際P.E.N.憲章」に基づき、「文学の普遍的価値の共有」「平和への希求と憎しみの除去」「思想・信条の自由、言論・表現の自由の擁護」を基本理念として活動してきました。

国際P.E.N.も日本ペンクラブも設立の背景には、戦争に対する危機感がありました。戦争に至る社会と世界は、いつ、どこにおいても味方と敵を作りだし、生命と人権を軽んじ、言論・表現の自由を抑圧する——そのことを身に沁みて知った文学者たちが、国境と言語、民族と宗教の壁を越えて集まったのが始まりです。

私たちは文学と文化的表現に立脚しながら、あらゆる戦争に反対します。いかなる国の核兵器と核実験も容認しません。そして、生命と人権、言論・表現の自由を守るための活動をつづけています。

●P.E.N.の意味

国際P.E.N.や日本ペンクラブの「P.E.N.」はもと、ポエット、プレイライトの「P」、エディター、エッセイストの「E」、ノベリストの「N」でした。

しかし、現代の表現活動がジャーナリズム、映像、音楽、漫画等から、さらにインターネットなどへ多様に広がり、そのすべてが言論・表現の自由の問題と関わっている現状を考慮し、入会資格も広がっています。

日本ペンクラブは、「平和の希求」と「言論・表現の自由の追求」という理念にご賛同いただくことが必須ですが、こうした表現とその普及に関わる活動をしている個人(一般会員)と、これを支持・支援しようとお考えの企業・団体・個人(賛助会員)の入会を歓迎しています。

●日本ペンクラブの独自事業

日本ペンクラブは国際P.E.N.と連携して活動す

る一方で、独自の文学・文化活動を展開しています。世界に140余ある各国・地域のペンセンターのなかでも、日本ペンクラブはもっとも活発なセンターといっても過言ではありません。その活動は時代と状況に応じて変わってきましたが、たとえば近年では次のような事業を行っています。

①**ふるさとと文学**……日本各地に作家や作品と深く結びついた地域があります(宮澤賢治と花巻、松本清張と小倉など)。この結びつきを現代的視点から再考し、オリジナル映像・朗読・対談・歌やパフォーマンスによってステージ上で展開する企画です。その第1回を、日本ペンクラブ創立80周年の2015年春、「島崎藤村の小諸」をテーマに開催し、大きな話題となりました。第2回は「石川達三の秋田」、第3回は……と、全国をめぐるしていきます。私たちはこの企画がとりわけ若い世代への刺激となって、地域社会の魅力に気づき、地元を活性化する力となっていくことを期待しています。

②**「平和の日」の集い**……東京で開催された1984年の国際P.E.N.大会は3月3日を「平和の日」と決めました。以来、日本ペンクラブはこの日の前後に、県や市などと提携し、各地で戦争と平和、自然と生命、歴史と文化等を市民とともに考えるイベントを開催しています。作家・俳優・アーティストなど数組が順番に登壇し、笑いと涙と怒りの対談や演奏をくり広げると、満席となった1000人、2000人のホールがどよめきます。現在、全国をほぼ一巡し、あらたな内容を準備しているところです。

③**戦争・憲法・核エネルギーを考える集い**……各地で頻発するテロと戦争、世界の均衡が崩れるたびに揺らぐ憲法観、核廃絶を願う一方で増大する原発依存。現代社会が抱える難問を考えるには、人間と文学・文化と歴史の視点からの洞察が必要です。日本ペンクラブは時宜に応じ、精力的に講



ふるさと文学 2015 / 島崎藤村の小諸

日本ペンクラブでの会合

演会やシンポジウムを開催しています。

④**「ペンの日」懇親会**……日本ペンクラブの創立は1935(昭和10)年11月26日。毎年、この日を「ペンの日」とし、盛大な懇親会を開催しています。この場で講演や演奏も行っています。日本文藝家協会、日本近代文学館、賛助会員の企業・組織、国際交流基金やユネスコ等の文化団体、行政や自治体、出版社やマスメディアの関係者などをお迎えし、大勢の会員と親睦を図っています。

⑤**京都例会**……関西在住の会員を中心に、毎年10月に京都で開かれる懇親と交流の集まりです。作家や茶道家元などによる講演や対談のあと、府知事や市長を交えた園遊会を行っています。

⑥**例会・忘年会**……毎年2月、6月、9月の3回(6月は定時総会のあと)、会員相互の親睦と交流を図る例会が開かれます。ミニ講演、新入会員の紹介、海外ゲストの挨拶など、なごやかな集まりです。また12月の忘年会は、会長はじめ各理事がその年の新入会員を歓迎するとともに、各委員

会が活動内容を説明し、委員会への参加を呼びかける場にもなっています。

⑦**声明**……言論・表現の自由の擁護は日本ペンクラブの最大のテーマです。この自由を抑圧する内外の動き、さらには人権抑圧や環境破壊、戦争や核実験に対して、私たちは抗議と反対の意思を声明にまとめ、記者会見を開くなどして迅速に公表しています。

⑧**自治体・企業・大学との提携事業**……日本ペンクラブの活動は会内だけにとどまりません。自治体や自治体が運営する文化施設やイベントと連携した文学講座(伊香保文学サロン、大田原市文学サロンなど)、企業と提携した講演企画・監修事業(JTフォーラムなど)、大学と共同で行う連続講義(専修大学、立命館大学など)といった活動も展開しています。今後もこうした活動を充実させるとともに、出版社との共同企画出版や書店と共催する文化イベント等を拡大していきます。



国際P.E.N.と日本ペンクラブの役割

●オリンピック、万博、国際P.E.N.大会

国際P.E.N.の創立から95年、日本ペンクラブの活動も80余年を経てきました。各国・各地域のペンセンターも140を超えています。国際P.E.N.は、ジョン・ゴールズワージー、H.G.ウェルズ、アルベルト・モラヴィア、アーサー・ミラー、マリオ・バルガス＝リョサなどへと会長を引き継ぎ、毎年1回、各地で国際P.E.N.大会を開催してきました。この間、オリンピック（社会インフラ）と万博（経済力）に次いで、「国際P.E.N.大会を開催できるくらい言論・表現の自由が成熟していなければ、一人前の国とは言えない」と並び称されるまでに存在感を高めてきました。

世界にはまだまだ表現の自由、思想・信条や信仰の自由、少数言語の使用等をめぐってさまざまな問題が起きています。国際P.E.N.は、これらの問題について声明や意見を発表し、国連とその関連組織やEUなどの国際機関に積極的な働きかけを行なっています。そのために、ロンドンにある本部スタッフは、世界各地のペンセンターから送られてくる種々の事例や情報を分析し、自由を奪われた作家・詩人・ジャーナリストたちを支援するための国境を越えたキャンペーン等を行なっています。

日本ペンクラブも国際P.E.N.と連携し、国内で起きる言論・表現の自由の問題に取り組むとともに、アジア地域の人権や自由の進展のために各国・各地域のペンセンターや、あるいは個々の作家・表現者たちと協働し、調査団を派遣するなどの活動をしてきました。民主化以前の韓国の文学者たちを支援し、ミャンマーのアウン・サン・スーチー氏を客員会員として迎えたことも、その一環です。現在もウクライナ、チベット、新疆ウイグル、中国など、厳しい政治状況に置かれている国や地域の作家、ジャーナリスト、人権活動家らと緊密な連絡を取り合い、活動しています。

●アジア・非欧米世界へ—あらたな役割

国際P.E.N.の活動はもともと近代文学が早くか

ら隆盛したヨーロッパで始まりました。そうしたなかであって、日本ペンクラブは草創期からアジアで声を上げた例外的な存在でした。しかし、21世紀の今日、非欧米の各地域からも世界文学と各分野のユニークな表現が続々と生まれています。この大きな地殻変動を反映し、日本ペンクラブも国際P.E.N.の中核ポストに会員を送るなど、活動の幅を広げてきました。

とはいえ、非欧米、とくにアジア諸国・諸地域にはペンセンターがなかったり、あっても政治的・経済的な理由などから活動が困難なところが少なくありません。グローバリズムが幾多の問題を引き起こしながら浸透していく現在、これらの国や地域で書き、表現しつづけている人々とつながり、ペンセンターを設立し、あるいは活発な活動を促すことも、日本ペンクラブの役割の大切なひとつとなっています。

すでに日本ペンクラブはアジアばかりでなく、欧米周辺のこうした国や地域のあちこちで、日本文学と文化の新しい潮流を紹介し、現地の作家・表現者と交流する〈日本文学・文化セミナー〉などの活動を始めています（カナダ、キルギス、ミャンマー、ハンガリー、チェコなどは既に開催）。ぜひみなさまも、こうした活動にご参加ください。



上) 国際ペン・日本ペンクラブ合同記者会見

下) 国際ペン・ケベック大会（2015年）会議場にて





日本ペンクラブの組織と運営

日本ペンクラブは、会員からの会費を基本財源とし、会長以下30名の理事と事務局スタッフによって運営されている一般社団法人です。

定款には「国際ペンの日本センターとして国際ペン憲章の趣旨にもとづき、言論、表現、出版の自由を擁護し、文学の振興と文化の国際的交流を増進し、世界平和に寄与することを目的とする」と掲げています。

全会員による総会は、年に1回開かれ、過去1年間の実績をふり返り、今後1年の活動について討議し、理事、監事を選任します。

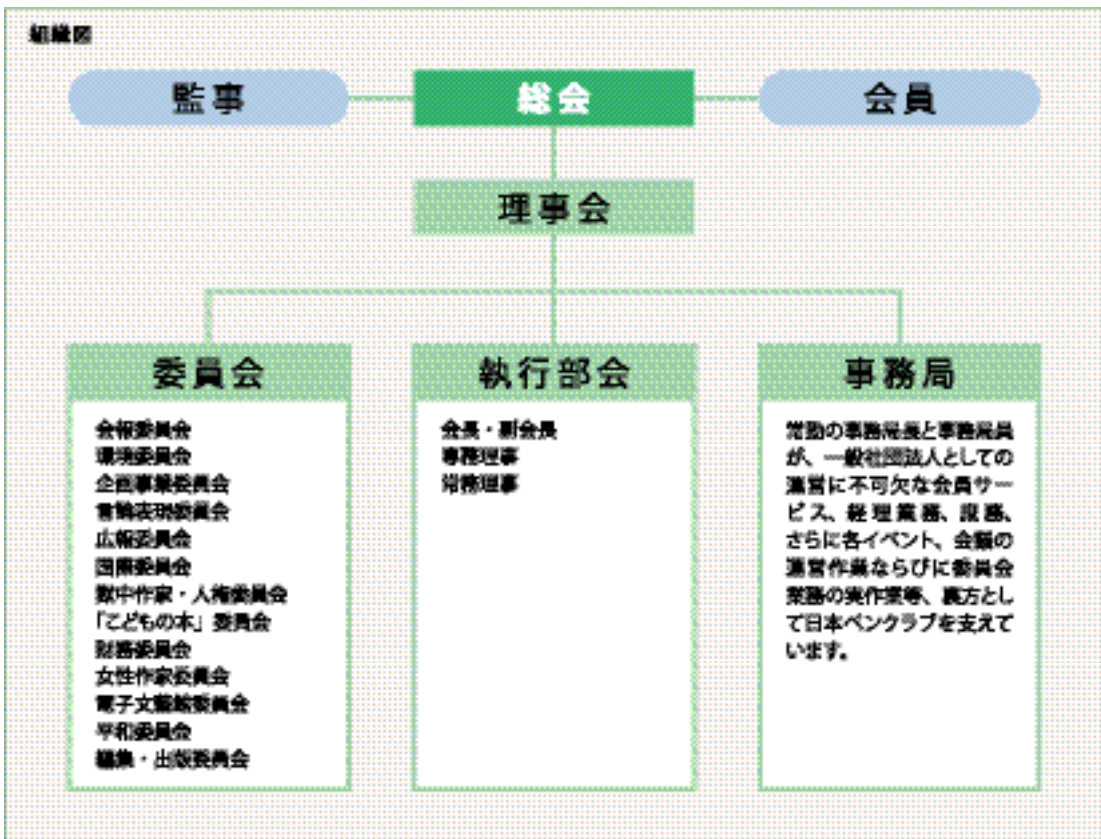
理事会の理事は2年に1度、全会員の選挙により20名が選出されます。その20名による互選によって会長を選出します。会長は円滑な会運営に必要な10名の理事を追加指名し、さらに執行部会を構成する副会長・専務理事・常務理事、および各委員会の委員長を指名します。

理事会は、年に10回開催され、予算や事業計画のほか、緊急に対応すべき課題を議論します。また、会員の入退会の承認や各委員会からの活動報告も行なわれます。

執行部会は、理事会に先立ち、議題の整理を行ないます。必要な場合には、理事会で決定された諸活動の準備・実施に当たります。

日本ペンクラブの日常的な活動は、13ある委員会によって展開されています。委員長の指名により、会員は関心のある委員会の委員になったり（委員数は最大35名まで）、随時開催される講演会やシンポジウム等に参加することができます。

事務局には、常勤の事務局長と事務局員がいます。会運営に不可欠な会員サービス、経理業務、庶務のほか、日本ペンクラブや各委員会が開催する種々の会合の運営作業等を行なっています。





委員会の活動

●会報委員会

会報『P.E.N.』の取材・編集・発行を行ない、すべての会員に送付します。日本ペンクラブが会の内外で行なった催事のレポート、理事会や委員会の報告、会員短信などのほか、今後の開催予定も掲載しています。

●環境委員会

人々が安全安心、豊かな気持ちで暮らすために、言論表現の自由を守り、最大の環境破壊ともいべき戦争に反対し、脱原発社会を目指します。環境汚染、次世代エネルギー、自然との共生等をテーマとし、専門家を招いた研究会、現地へ赴いてのフィールドワークを行なって発言し、行動していきます。



ウクライナ・チェルノブイリ記念公園にて

●企画事業委員会

日本ペンクラブが自治体等と共催する「平和の日」(3月3日前後、平和委員会担当)、創立記念日を祝う「ペンの日」(11月26日)、会員同士の親睦と交流を図る例会(東京と京都)、その他各委員会の大がかりなイベントなどの内容を詰め、必要な準備をし、運営します。

●言論表現委員会

言論・表現をめぐる国内外の状況は、政府による機密情報や個人情報への扱い、権力と放送などマスメディアの自由の関係、テロや戦争とジャーナリストの安全の問題など、刻々と変化しています。これらに迅速に対応するため、日頃から勉強会・セミナー・シンポジウムを開催し、必要な場合に

は、声明の発表もします。また、関係各方面と協力し、電子メディアや図書館のあり方などについても議論を重ねています。

●広報委員会

会報委員会が会内に向けての発信が中心とすれば、広報委員会の仕事は、会外、一般の人たちに日本ペンクラブのさまざまな活動を知っていただくことです。ホームページの運営、毎月のメールマガジンの発行、ソーシャルメディアの活用のほか、記者会見や文化イベントを開催する際は新聞・雑誌やテレビの対応もします。

●国際委員会

ロンドンの国際P.E.N.や各地域のペンセンター、作家団体など、海外との連絡や折衝を行ない、言論・表現、文芸、人権、テロと戦争などの課題について、国際的視野に立った活動を行なっています。委員には各国・地域の翻訳者・研究者も多く、中国とは交互に訪問し合う「日中文学者交流」事業を継続し、中央アジア、カナダ等では独自の「日本文学セミナー」も開催してきました。こうした企画を今後も拡げていきます。

●獄中作家・人権委員会

現在の国際P.E.N.でもっとも活発なのがWiP(Writers in Prison)、つまり獄中作家委員会です。そのWiPと連携し、言論活動を理由に獄中にある作家や表現者の救援活動を行ない、そうした状況を作り出す政府と国家のあり方を厳しく問う活動をしています。また、これに関連し、文学者の視点から死刑制度をめぐる表現についても議論を深めています。

●「子どもの本」委員会

海外作家との交流、子どもたちが文学に親しむ環境作り、表現の自由や人権意識の養成をめざし、国内外で活動しています。プラハのブックフェアで日本の子どもの本の紹介、ベルリンで日独作家

シンポジウムを開催、東日本大震災のあとでは子ども図書館や移動図書館の運営に参加、さらに『10歳の質問箱』の企画出版や、子どもの命や核や平和をテーマにした活動など活発です。



●財務委員会

日本ペンクラブが縦横に活躍するためには、健全な財政基盤の確立が欠かせません。そのために財務状況、委員会や事務局の会計処理が適正に行なわれているか等を不断にチェックし、必要な場合は助言し、理事会や監事に報告しています。また、中長期的な方策を検討し、あらたな事業プランも提案していきます。

●女性作家委員会

国際P.E.N.には、作家やさまざまな分野の表現者が協力して作っている女性作家委員会があります。日本ペンクラブの女性作家委員会もこれと提携し、世界各地で抑圧されている女性作家と表現者の地位向上をめざすとともに、あらたな表現の可能性を求めて研鑽を重ねています。



●電子文藝館委員会

日本ペンクラブが設立・運営するインターネット上の「図書館」です。河竹黙阿弥らペン創設以前の作家、初代会長島崎藤村以来の先輩会員、現会員の自愛・自薦の作品、英訳された歴代会長の作品など、すでに約1000点を掲載した電子文藝館は、近代日本文学の網羅展覧を志し、日々充実していきます。どうぞ作品をお寄せください。



●平和委員会

平和の希求は、国際P.E.N.の根本原理です。日本ペンクラブも文学・文化に関わる立場から、そのために何ができるかを考えつづけてきました。1984年の国際P.E.N.東京大会が毎年3月3日を「平和の日」と定めて以来、平和委員会は各地の自治体などと共催し、平和・生命・自然・文化等をテーマに盛大なイベントを開催しています。2016年度からは「戦争と文学」というテーマで、シンポジウム、勉強会を行っています。

●編集・出版委員会

憲法・戦争・原発の本から、麺やうなぎ、ミステリーや恋愛、鉄道や映画のアンソロジーまで、日本ペンクラブ編で刊行しています。幾多の小説や詩やエッセイを涉猟し、本を編むのは大変ながら、楽しい仕事です。人の心に響き、少しでも世の中を明るくする本作りを心がけています。



日本ペンクラブのあゆみ

●国際P.E.N.の創設と日本ペンクラブの夜明け

文学に何ができるか？ 第一次世界大戦後の荒廃を目の当たりにした欧州の文学者たちは考え込みました。「戦争のとき、まず犠牲になるのは真実だ。言論と表現の自由を守り、書き手たちが国境を越えて作品を理解し合い、語り合うことこそ、戦争を食い止め、平和に寄与する道ではないか」。1921年、そう思い至った文学者たちによって国際P.E.N.は創設されました(本部はロンドン)。

そのころ日本は、関東大震災、治安維持法、昭和恐慌、満州事変と、やがて歴史の泥沼へと落ち込む崖の縁に立っていました。国際的孤立を深めるなか、文学者たちは「せめてわれわれは諸外国の作家たちと交流をつづけよう」と動き始めます。1935(昭10)年11月、日本ペンクラブは島崎藤村を会長に、約100名の文学者によって設立されました。会長自身が南米で開かれた国際P.E.N.大会に参加し、夏目漱石や芥川龍之介の翻訳紹介が始まるなど、滑り出しは順調かに見えました。

しかし、日中戦争の開始、真珠湾攻撃・太平洋戦争への突入という緊迫した時代は始まったばかりの活動を窒息させていきます。「もはやわれわれは連絡することすら不可能な状態にある。しかし、われわれは存在する」。当時、日本ペンクラブが国際P.E.N.に送ったこの電文が、当時の苦衷を物語っています。自由な言論は封殺され、もはや会合を開くことすらできないまま、1945(昭20)年夏の敗戦を迎えます。

●武器なき国の建設と冷戦期の国際ペン大会

敗戦後、国内のそこそこに焦土が残るなか、日本ペンクラブは「文化国家の建設、即ち心にも

手にも武器なき国の建設がわが文化人に與えられた任務である」と再建の覚悟を内外に表明し、1948(昭23)年6月、国際P.E.N.に復帰しました。

しかし、戦後の東西冷戦下、新興国も独裁に陥るなど、国際情勢はあちこちで緊迫しました。この時期、日本ペンクラブは国際P.E.N.大会を東京に招致します。最初は1957(昭32)年、テーマは「東西文学の相互影響」。次は1984(昭59)年、テーマは「核状況下における文学」。文学は現実政治に直接関与しないが、そこで生きている人間の生命と運命には深く関わっている。こうした大会のテーマには、きびしい時代をくぐり抜けてきた作家たちが、あらためて文学の可能性を問おうとした姿勢が示されています。

また、これらの大会にスタインベック、ヴォネガット(米国)、モラヴィア(イタリア)、シリトー(英国)、ロブ・グリエ(フランス)、巴金(中国)らが参加したことは、日本の読者を外国の作家・作品に近づけ、読書の幅を広げていくきっかけとなりました。

そして、80年代末から90年代にかけて起きたベルリンの壁の崩壊とソ連の解体。世界は21世紀に向け、戦争の世紀に終わりを告げて歩み出すはずでした。

●テロと戦争と天変地異の世界で、文学的な模索

21世紀の幕開けは荒々しいものでした。ニューヨークで起きた9・11同時多発テロは、グローバル化した資本が各地で格差を作り出し、憎悪と暴力を生み出している実態を明らかにしました。その一方、地球規模で顕在化した気候異変と、アジアで頻発した大地震や大津波などの自然災害は、街や都市の暮らしがいかに危ういかを浮き彫

1936年
国際ペンエノス
アイレス大会にむ
かう島崎藤村代
会長



1957年
国際ペン東京大会
での島崎藤村代
会長



1984年
国際ペン東京大会



りにしました。

これらの現実を前にして、日本ペンクラブはあらたな文学的模索を始めます。その最初は、米国がアフガニスタンについてイラクに攻め入った2004(平15)年、『それでも私は戦争に反対します。』(平凡社)の刊行です。これは、あらゆる戦争と暴力に反対する、という創立以来の理念を再確認するとともに、その思いを数十人の作家たちが小説や詩やエッセイなどに表現したものでした。

さらに2008(平20)年2月、独自に企画した世界P.E.N.フォーラム「災害と文化——叫ぶ、生きる、生きなおす」の開催。ここでは中国、インドネシア、サモア、米国、日本などの作家、映画監督、ミュージシャンらが登壇し、絵画・映像・演奏によって多彩に表現された作品を朗読するなど、これまでにない文学的表現によって人間と自然との関係に光を当てました(中国から参加した作家、莫言は4年後、ノーベル文学賞を受賞)。

そして、3回目となる2010(平22)年の国際P.E.N.東京大会の開催があります。テーマは「環境と文学——いま何を書くか」。グローバル市場・多元文化・電子的ネットワークという人工環境と自然環境がせめぎ合い、政治と国境と宗教が人々を分断する世界にあって、何を書くか、何を表現するか。アフリカ、中東、欧米と日本の作家たちの作品を朗読・映像・演奏によってステージ化した文学フォーラム、ノーベル文学賞作家・高行健らの基調講演、日本ペンクラブ各委員会が企画した各種セミナーには数千人の観衆が詰めかけました(この大会で中国政府に釈放を求めた人権活動家、劉曉波は1ヵ月後、ノーベル平和賞を受賞)。

しかし、このとき、災害や環境をテーマに国際的イベントを実現してきた日本ペンクラブの誰

も、半年後に起きる大惨事を予想だにしていませんでした。

●原発と憲法と動く現実、文学に何ができるか？

2011年3月11日、東日本大震災。最大震度7、大津波による死者・行方不明者2万人、全半壊の家屋40万戸。これに、東京電力福島第一原発のメルトダウン事故が追い打ちをかけ、避難民は40万人を超えました。1000年に1度とも言われる大災害は、日本ペンクラブにも激震となりました。

多くの会員が取材やボランティア活動で被災地に駆けつけました。原発被災地に入り、独自のレポートをする。津波被災者の聴き取りをする。仮設図書館を設置する。さらにチェルノブイリを訪ね、原発事故がもたらす影響を調査する……。こうした活動の一方、日本ペンクラブは『それでも私は原発に反対します。』(平凡社)を刊行します。数十人の書き手たちが寄せた小説、戯曲、エッセイは原爆と原発を生んだ核エネルギーの危険性と、そこに依存する現代世界がいかに危ういかを真正面から描くものでした。

私たちはたえず動く現実生きています。収束の見えない原発事故と再稼働の動き、疲弊する地域社会、近隣諸国との軋轢、そのたびに噴き出すナショナリズムと歴史修正主義、主権在民と立憲主義の日本国憲法を否定しようと勢いづく政治勢力……。文学に何ができるか？ 表現に何が可能か？ 日本ペンクラブに集まる私たちは、1世紀近く前の文学者たちが、真実を犠牲にしてはならない、平和と言論・表現の自由を手放してはならないと語り合った初心を、いまあらためて思い起こしています。



2001年
いま「戦争と平和」
を考える講演会



2008年
世界P.E.N.フォー
ラム「災害と文化」





●会員区分

Poets
 (詩人)
Playwrights
 (劇作家)
Essayists **Editors**
 (随筆家・評論家) (編集者)
Novellists
 (小説家)



P会員
詩人、俳人、歌人、脚本家、劇作家、放送作家

B会員
エッセイスト、翻訳家、学者、編集・出版人、記者、ジャーナリスト、評論家、漫画家、映画監督、放送番組制作者、俳優、演出家、画家、装幀家、デザイナー、写真家、書店・図書館・美術館・博物館・文学館等の専門職員

N会員
小説家、ノンフィクション作家、ネット媒体で活躍する作家

賛助会員
日本ペンクラブと国際P.E.N.の趣旨に賛同する一般企業、新聞社、出版社、文学館、書店、団体・組織と一般個人

●入会案内

日本ペンクラブは、言論・表現の自由と平和を守り、世界の文学者と交流する団体です。

会員は、上記のような表現活動及びその普及に携わっていること、国際P.E.N.憲章に賛同していただくことが求められます。

入会手続きとしては、入会申込書に記入し提出していただきます。その際、会員2名（うち1名は理事）の推薦を得てください。

入会申込書は、日本ペンクラブ事務局を經由して、月例の理事会に提出されます。理事会では、推薦者となった理事が、入会申込者についてご紹介します。

理事会で入会が承認されると、事務局からご連絡しますので、入会金と年会費を納入してください。

くわしくは日本ペンクラブのホームページ（<http://www.japanpen.or.jp/>）等をご参照のうえ、事務局までお問い合わせください。



THIS IS THE P.E.N.
日本ペンクラブガイド

© THE JAPAN P.E.N. CLUB Printed in Japan 2016

2016年発行
発行人 浅田次郎
発行所 一般社団法人 日本ペンクラブ
〒103-0026 東京都中央区日本橋本町2D-3
TEL: 03-5614-5391 FAX: 03-5695-7686
e-mail: info@japanpen.or.jp
URL: <http://www.japanpen.or.jp>